

平安仮名文学における「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」

楊 卓 婧

Abstract

はじめに

平安仮名文学において、「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」などのように、絵に見立てることと関連する常套的な表現は自然や人物への賛美として散見される。先行研究では、概ね『源氏物語』を研究対象にして論述している。例えば、この二種の表現が生みだされた要因について、片野「一九九二」は、作者には理想的な絵画的形象があり、「物語の世界で、もつともそれに近い世界を想像した時、このような表現が生まれたもの」と推察している。また、物語絵の創作の視座からとらえるモストウ「一九九七」などの先行論が挙げられる。一方、これら二つの表現の相違に注目する論がほぼ見られない中で、伊井「二〇〇一」は、「絵にかきたるやう」では自然に関わる例が多いのに対して、『栄花物語』の「絵にかかまほし」の大半は記録性を意図したと指摘している。

一方で、上野「二〇〇二」は、写真・ビデオ類の存在しなかった時代において、絵画の持つ記録性・記念性という機能は重要なものであったと指摘している。確かに絵画にはその役割もあると思われる。例えば、『栄花物語』では、禎子内親王の裳着の儀に際して、彼女の「いみじくうつくしげに、御髪懸るほど、なべてならずめでた」いという姿を「絵」で記録しようと考えている（『御裳着』②三三六頁）。しかし、「絵はめでたかきたれど、ものいはず動かねばかひなし」（同頁）、つまり、姫宮の様子を絵に描けば、素晴らしく表現できるが、ものを言わないし、動かないから効果がないとも評

価している。要するに、「絵」の静的な性質は既にネガティブに認識されているのである。

また『枕草子』について論じる沢田「一九八五」は、絵画に見立てることについて、見立てとは絵の構図にあてはまる場合が多く、絵画性が強いものであり、「静止した状態にあることが、また静止した状態としてとらえやすいことが出発点」であるとまとめている。要するに、「静的」な場面は絵画性が強いから見立てにもされやすいということであろう。この論点は果たして、平安仮名文学全般にも適応しうるだろうか。さらに、そのようであるとすれば、絵画や写真のような静止画とビデオのような動画との間に大きな差異があるように、「静的」な場面と「動的」な場面との使い分けが物語においてなされているとみることは可能だろうか。

本稿では、「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」などの絵に見立てる表現に注目し、大きく二種類に分かれるこれらの表現の差異、特に『源氏物語』以前には用例の見られない「絵に描かまほし」の用法に留意してゆく。まず、「絵に描かまほし」の初出例が見られる『源氏物語』を対象に、「静」と「動」の使い分けがなされているかどうかを確認してみる。さらに、平安仮名文学作品における用例を全体的に俯瞰し、同様の使い分けがなされているかどうかを検討するとともに、『源氏物語』における用例の特殊性をとらえてみたい。実は他に、「絵に描くとも筆も及ぶまじ」のような表現が九例見られる。意味上は「絵に描きたるやう」とも「絵に描かまほし」とも異なり、また紙幅の都合もあるため、本稿では詳しくとりあげないが、関連する

表現として付言しておく。⁽¹⁾

一 『源氏物語』 において絵に見立てられる例

『源氏物語』における「絵にかきたるやう」とそれに類すると判断される表現は八例確認できる。以下、それぞれの例について順に検討してみよう。

①夕暮の静かなるに、空のけしきいとあはれに、御前の前栽枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のやうやう色づくほど、絵に描きたるやうに おもしろきを見わたして、……
〔夕顔〕①一八七頁

夕顔の死亡後、右近は二条院に移っていた。本文①の二条院の秋景色は、右近によって、一枚の絵に収められたかのである。そして、本文中でも二重傍線部で示されているとおり、「静か」であると語られている。

②背後の山に立ち出でて京の方を見たまふ。はるかに霞みわたる、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、源氏「絵にいとよくも似たる かな。……」
〔若紫〕①二〇一頁～二〇二頁

これは光源氏が北山で見た景色である。光源氏は大自然に囲まれて、思わず「絵にいとよくも似たる」と讃嘆した。景色の中に「霞」があるが、動いているものとは思われない。

③女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、……からうじて渡り たまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうにし ゑられて、うち みじろきたまふこともかたく、……
〔若紫〕①二六頁

光源氏は久しぶりに葵の上を訪ねた。しかし、葵の上は相変わらず打ち解けないで、絵に描いたように動かないできちんとしていて、源氏を敬遠している。ここの「絵」の比喩は、正しく葵の上の動かない様子を強調しているように見える。

④東の対に渡りたまへるに、たち出でて、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前栽絵にかけるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位 五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、げにをかしき所かなと思す。
〔若紫〕①二五八頁

これは二条院に移ったばかりの紫の君（後の紫の上）が見た二条院の様子で

ある。庭も池も前栽も絵に描いたようで、素敵な邸だと感心している。注意したいのは、静かな景色の方だけを「絵」に喩えているが、出入りする人物については喩えていないことである。

⑤住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。
〔須磨〕②二三頁

これは宰相中将（かつての頭中将）が須磨で見た光源氏の「唐めい」ている住まいである。「竹の垣、石の階、松の柱」は動的とはいいいがたく、静的な描写である。

⑥……心もとなきほどの灯影に、御髪いとをかしげにはなやかに削ぎて、倚りゐたまへる、絵に描きたらむさましていみじうあはれなり。
〔落標〕②三二頁

これは須磨から帰京した光源氏によって垣間見された六条御息所の尼姿である。尼削ぎの髪、物に寄りかかっている姿を「絵のように美しい」と感動している。物に寄りかかっている様子は、動的というよりもむしろ静的な描写である。

⑦竜頭鵲首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、……まことの知らぬ国に來たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。
〔胡蝶〕③一六六頁

これは秋好中宮付きの女房が紫の上に招待された時に見た六条院春の町（東南の町）の景色である。「見知らぬ国」に來たような心地がするという。特に、立石に焦点があてられて、絵に描いたようだと語られている。立石なので、当然静的な描写である。

⑧紛るることなくあらまほしき御住まひに、御前の前栽ほかのには似ず、同じき花の姿も、木草のなびきさまもことに見なされて、遣水にすめる月の影さへ絵に描きたるやうなるに、……
〔総角〕⑤二五九頁

これは薫が見た六条院の勾宮の住まいである。よそと違って、「遣水にすめる月の影」まで絵に描いたように感じられたという。遣水は流れているだ

ろうが、それは動的というよりも、本文が示すとおり「月の影」を映している静的なものとすべきであろう。

以上を整理してみると、「絵に描きたるやう」という八例の表現のうち、自然は六例あり、人物は二例ある。ただし、前者では、自然そのもの(②の北山)より、①④⑤⑦⑧の二条院、六条院ほかの庭園など、人工的な「自然もどき」のほうが多い。そして、これらの対象はほぼ静的な存在であることが確認された。一方で、人物をとらえた③・⑥の二例もまた、静的な姿の描写であつた。

続いて、「絵に描かまほし」の用例を分析してみよう。『源氏物語』ではわずかに三例しかないが、いずれも人物に関わっている。

⑨をかしげなる侍童の姿好ましう、ことさらめきたる、指貫の裾露けげに、花の中にまじりて朝顔折りてまるるほどなど、絵に描かまほしげなり。
(夕顔) ①一四八頁

これは六条御息所邸の侍童の描写である。花の中に分け入り、朝顔を折って差しあげている様子を絵に描きたいと願いをかけている。この侍童の動作は動的であろう。

⑩源氏「あやしく例ならぬ御気色こそ心得がたけれ」とて、御髪をかきやりつつ、いとほしと思したるさまも、絵に描かまほしき御あはひなり。
(朝顔) ②四八八頁～四八九頁

「朝顔」巻では、光源氏は紫の上に朝顔の姫君との仲について弁明したあと、紫の上を慰めるために、「御髪をかきやりつつ」という行動をとっている。そしてこれらの二人の様子が「絵に描かまほしき」と語られている。髪を掻きやるというのは、派手な動きではないものの、一種の動的な様であるう。

⑪薄鈍色の綾、中には萱草など澄みたる色を着て、……行ひなどをしたまふも、なほ数珠は近き帳にうち懸けて、経に心を入れて読みたまへるさま、絵にも描かまほし。
(手習) ⑥三五〇頁～三五一頁

これは妹尼が尼姿の浮舟を覗き見している場面である。浮舟は声をあげて読経している。「数珠」から解放された手で経机などにあつた経典を捲りなが

ら読んでいる姿が、「心を入れ」ているように妹尼は感じたようだ。ここでは、経を読むという行為なので、積極的に体を動かしている場面とはいいがたいが、静的といいきれる描写でもなからう。

以上からみれば、「絵に描かまほし」は、人物の(激しいとは言えない程度の)動作を絵に描いて限りなく保存したいという気持ちを表すようである。

このあとより丁寧に確認してゆくように、「絵に描かまほし」という表現は『源氏物語』で初めて用いられている。ビデオなどのテクノロジーがない時代に、作者の鋭い感覚によつて、静止画の絵ではなかなかあらわしきれない動的なものをとらえよう(あるいは保存しよう)とする表現を開拓した可能性が考えられよう。さらに、「静的」と「動的」の差異を感じ取り、「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」でその区別を表したのではないだろうか。この「動的」と「静的」の対比という特徴は平安時代のほかの仮名文学に見られるだろうか。次節以降で検討してみよう。

二 平安仮名文学における「絵に描きたるやう」など

まず、平安和歌文学においては、日本文学 Web 図書館の「和歌・連歌・俳諧ライブラリー」を利用し、関連表現を検索した結果、「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」、及びこれらに類似する表現は見当たらなかった^②。ただし、文言が少々異なる例としてわずかに二首が見出された^③。また、散文作品のうち、『竹取物語』・『土佐日記』・『伊勢物語』・『大和物語』・『平中物語』・『落窪物語』・『和泉式部日記』では、これらの表現が見出されなかった。

本節では、まず、「絵に描きたるやう」などの用例を見ていく。『源氏物語』以外に、十三の作品において四十五の用例が確認された。以下において、概ね作品の成立時代順に用例を検討してみよう。なお、しばしば見出される「絵の心地して」などについては、意味上から、「絵に描きたるやう」と相似する表現として用例に含めている。

●『蜻蛉日記』二例

⑫夜の明るくまに見やりたれば、東に風はいとのどかにて、霧たちわた

り、川のあなたは絵にかきたるやうにみえたり。川づらに放ち馬どものあさりありくも、遥かに見えたり。いとあはれなり。

（中巻（天禄元年七月）二〇七頁～二〇八頁）

これは作者が石山寺詣の時に、見た石山寺の東を流れる瀬田川のほとりの景色である。絵に喩えている川岸の馬の群れが回っている姿を遥かに見て、深い感動を覚えた。馬が回っている様子なので、「絵にかきたるやう」の例ではあるが、動的な描写である。

⑬例も清げなる人の、練りそしたる着て、……風はやきほどに、纓吹きあげられつつ立てるさま、絵にかきたるやうなり。

（下巻（天延二年二月～四月）三二九頁）

これは作者が見た藤原速度の姿である。身なりを言った後で、風が強いから、纓が吹き上げられている様子が絵に描いたようだと語られている。動的な描写である。

●『うつほ物語』一例

⑭次に、大将の居給へる所に、かたちよく、髪長くて、髪一本に結ひたる男童の、よきほどなる四人、かけそにして、南の方の山の木の根に造りかけたる反橋の方より参らす。少し下りたる高欄に出でて、参る。絵に描きたること、面白し。

（『うつほ物語』「楼の上」下「八八六頁」）

ここで、「絵」に見立てているのは、楼全体の構図及び仲忠の食事姿だろう。全体的に静かな雰囲気漂っているが、食べているので、やはり、動的な描写だと考えてよい。

●『枕草子』六例

⑮そのはじめより、やがてはつる日まで立てたる車のありけるに、人寄り来とも見えず、すべてただあさましう絵などのやうにて過ぐしければ、……

（「三三、小白川といふ所は」八二頁）

法華八講を行ったときに、一台の車だけが、完全にあきれるほどに絵のよう動かずに過ぐしてきた。「絵」は正しく不動の有様を比喻している。静的な描写である。

⑯桜の綾の直衣、いみじうはなばたと、……せばき縁に片つつ方は下ながら、

すこし簾のもと近う寄りあたまへるぞ、まことに絵にかき、物語のめできき事に言ひたる、これにこそはとぞ見えたる。

（「七九、返る年の二月二十余日」一四二頁）

作者が観察した藤原齊信の姿である。簾のもと近く寄って座っている様子は、絵に描いたように素晴らしいと見えるから、静的な描写だと思われる。

⑰唐絵に描きたる懸盤して物食はせたるを見入る人もなければ、……

（「九五、五月の御精進のほど」一八六頁）

作者は高階明順の家を訪ねたときに、食べ物や食器が唐絵に描いたようなものと観察している。懸盤の説明なので、静的な描写と考えてもよいだろう。

⑱淑景舎は北にすこし寄りて、南向きにおはす。……扇をつとさし隠したまへる、いみじう、げにめでたくうつくしと見えたまふ。……淑景舎の、いとうつくしげに、絵に描いたるやうにてあさせたまへるに、……

（「一〇〇、淑景舎、東宮にまゐりたまふほどの事など」二〇二頁～二〇三頁）

中宮の妹原子が、東宮（のちの三条帝）のもとに入内する時の様子である。淑景舎の北に寄って座っている様子なので、静的な描写である。

⑲宮は、白き御衣どもに、紅の唐綾をぞ上に奉りたる。御髪のかからせたまへるなど、絵に描きたるをこそ、……

（「一七九、宮にはじめてまゐりたるころ」三二〇頁）

作者が初宮仕えの頃に、観察した中宮の優美な姿の中で、特に髪の様子は絵に喩えられている。静的な描写である。

⑳……みな御裳、御唐衣、御匣殿までに着たまへり。殿の上は、裳の上に小桂をぞ着たまへる。「絵に描きたるやうなる御さまどもかな。……」

（「二六〇、関白殿、二月二十一日に、法興院の」四一三頁）

中宮のいる棧敷で、中宮、御匣殿、北の方まで着用している服を関白道隆が「絵に描いてあるように」と褒めている。中宮たちが座っているので、静的な描写と考えてもよい。

●『紫式部日記』六例

㉑……弁の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、昼寝したまへるほどなり

けり。：顔はひき入て、硯の筥にまくらして、臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし。絵にかきたるものの姫君の心ちすれば、……

(七) 宰相の君の昼寝姿——八月二十六日、二二八頁

作者は宰相の君の昼寝姿を絵に喩えている。寝相なので、静的な描写である。

②2 よろづのもののくもりなく白き御前に、人の様態、色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、よき墨絵に、髪どもをおほしたるやうに見ゆ。
(二六) 女房たちの服装、一四〇頁

彰子が若宮を出産する時に、白い服装で髪だけが黒い女房たちの姿を、墨絵に髪を生やしたようだと喩えている。特に動的な描写はないので、静的と考えてもよいだろう。

②3 女房のあたる、南の柱もとより、簾をすこしひきあけて、内侍二人出づ。その日の髪上げうるはしき姿、唐絵ををかしげにかきたるやうなり。

(二六) 土御門邸御幸——十月十六日、一五四頁

土御門邸御幸の時に、内侍二人の髪上げうるはしき姿を、「唐絵」に喩えている。ここでは、二人が出るところであり、動的な描写であろう。

②4 うちとけたるをりこそ、まほならぬかたちもうちまじりて見えわかれけれ、心をつくしてつくろひけさうじ、劣らじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て、……

(二六) 土御門邸御幸——十月十六日、一五六頁

②3 と同じ御幸の時に、作者が観察した女房の姿である。普段とは違って、身なりも化粧も整っているので、女絵にそっくりと褒めたのである。全体の雰囲気「絵」に喩えているので、静的な描写と考えてもよいだろう。

②5 例の、人々のしたててまうのぼりつどひたる御前の有様、絵にかきたる物合の所にぞ、いとよう似て侍し。

(三〇) 御五十日の祝い——十一月一日、一六二頁

若宮誕生の五十日目の祝いに、女房たちの姿を「絵」に喩えている。ここでは、正服姿の人々の左右に列座している光景なので、静的な描写と考えてもよい。

②6 五節の弁……絵にかいたる顔して、額いたうはれたる人の、まじりいたうひきて、顔もここはやと見ゆるところなく、色白う、……

(四六) 人々の容姿と性格、一九二頁

五節の弁の「絵にかいたる顔」は、引目鉤鼻の顔に近いだろう。ここでは、顔つきに注目しているので、静的な描写だろう。

●『栄花物語』十五例

②7 火焚屋、土御門殿の御前にありし、絵にかきたるやうなりしを、この御前にて、はた今すこし気異なる心地するも、うちつけの目なるべし。

(かかやく藤壺)①三二四頁～三二五頁

彰子が入内する時に、一緒に宮中に移された火焚屋は、土御門殿の庭にあつた時は、「絵に描いたよう」であるが、この藤壺の庭では、また目新しいところがある。建物なので、これは静的な描写である。

②8 ……小さくはあらぬが、髪長う様体をかしげにて、汗衫ばかりをぞ着せさせたまへる、表袴は着ず、その姿有様絵に描きたるやうにて、なまめかしうをかしげなり。
(はつはな)①三八五頁～三八六頁

彰子の髪も器量も素晴らしい童女が汗衫だけを着用している姿はまるで「絵に描いたように」優美である。彰子は手習のために、「添ひ臥させたまへり」、童女は彰子の周りにいるだけで、特に動いている描写もないと思われる。

②9 白装束どものさまざまなるは、ただ墨絵の心地していとなまめかし。

(はつはな)①四〇五頁

敦成親王の御湯殿に、白装束を着る女房たちの様子は「墨絵」に喩えられている。服装の全体的なイメージであるから、静的だと思われる。

③0 ……すこし引き上げて内侍二人出づ。髪上げ、うるはしき姿ども、ただ唐絵か、もして天人の天降りたるかと見えたり。

(はつはな)①四一三頁

一条天皇の土御門殿への御幸の際に、内侍二人の髪姿の描写である。二人は歩いているので、動的な一面が感じられる。

③1 藏人少将いと色合うつくしう、顔つききよげに、あべきかぎり、絵にかきたる男のさまして、……
(はつはな)①四五二頁

伊周家の人々を紹介する中に、息子の道雅の肌の色合、顔つきなどは最高で、絵に描いたような美男子の有様である。顔全体を言っているので、静的な描写であろう。

③② いみじうめでたうしつらひたる御帳の前に、短き几帳引き寄せておはします。御衣の裾に御髪のみたりたる、御几帳の側より見ゆるほど、ただ絵にかきたるやうなり。〔たまのむらぎく〕②五六頁

頼通が几帳から見た北の方の髪姿を絵に喩えている。隆姫が座っているの、静的な場面である。

③③ ……殿ばらなどの参りたまふ。さるべき御隨身などの、いみじうつきつきしきさまして、中門のほどに弓杖つきてゐたるほどなど、ただ絵にかきたると見ゆ。〔わかばえ〕②四四七頁

隨身たちの弓杖について立っている様子はまったく絵にかいたような姿である。中門のあたりでの警備の様子だが、動作などはみられないので静的な場面である。

③④ ……きたなげなき四位、五位、六位などの、さまざま取りつづきもてまゐる有様、奥つ方の御屏風などまで、見るにもまことに絵にかきたる有様、いづこかたがひたるとぞ見るに、……〔わかみづ〕③八六頁

枇杷殿の臨時客に、人々が物を運ぶ様子を絵に喩えている。動物的描写である。

③⑤ 泉の上の渡殿に、四条の中納言参りたまへるに、出羽弁対面したるに、殿、……添ひおはします。なかなかいとおつましく、もの聞えたまふも、うち出でにくくおぼえけり。絵にかきたる心地す。〔調合〕③二四〇頁

彰子の高陽院御幸の時、定頼が参上し、出羽弁が対面していると、頼通が弁のそばに寄り添った場面である。頼通がいるため、出羽弁は定頼との会話をしにくくなっている。その情景を絵に喩えている。会話を交わす場面なので、やや動的な面を含むであろう。

③⑥ 三位輔親をぞ、この歌の勝負定むべき人にて召したる。歌のよしあしは、いかか定むらん、神さびてゐたる、面持気色、絵にかきたる心地して、……〔調合〕③二四八頁

高陽院水閣歌合における、判者の輔親の様子である。神々しい様子、表情を絵に喩えている。「神さびて」座っているというので、静的な描写であろう。

③⑦ 玉の冠して胡床どもの上に居並みたる、唐絵の心地して、……〔根あはせ〕③三四〇頁

後冷泉天皇が即位の時に、王冠をかぶり胡座の上に座っている様子を唐絵に喩えている。静的な描写である。

③⑧ 御堂の方を見れば、唐絵の心地して見たさる。庭の雪は消え方になりけり。梢ぞ盛りと見ゆる。〔根あはせ〕③三四七頁

これは章子内親王の女房が見た法成寺の御堂及び雪景色の一部分である。雪が降った後の世界は静的な描写である。

③⑨ 所のさま御しつらひもいとをかしく見ゆ。薄物の御几帳の裏うちかけて、わざと見えさせたまはねど、透きとおはしますほどなど、絵にかきたらん心地してをかし。〔けぶりの後〕③四〇八頁～四〇九頁

帝から遣わされた内侍が見た女御観子の部屋の様子である。几帳の裏があげられて、透けてみえる様子を絵に描いたように感じている。室内の様子は静的である。

④⑩ ……弘徽殿、登花殿の細殿には、萩、女郎花の几帳、色々に押し出されたるが、上の御局より長々と見わたされたる、絵にかきたる心地していとをかし。〔松のしづえ〕③四四〇頁

内裏が新たに竣工後、後宮の女御たちはそれぞれの住まいに入った描写である。弘徽殿と登花殿の細殿に、萩や女郎花の几帳が立てられ、御簾の下から押し出されている。ここは上から建物を見渡す場面であり、静的である。

④⑪ 祿の唐櫃御前に昇き立て、祿賜るほどなど、絵にかきたるやうにをかしうめでたし。〔布引の滝〕③四七七頁

敦文親王の産養に、人々の祿を入れた唐櫃を御前に担いで来て、祿を賜る有様を絵に喩えている。物配りの場面なので、動的である。

●『浜松中納言物語』七例

④⑫ 明くる日、この関に御迎への人々参りたり。そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じことなり。〔①三三頁〕

唐国の人々の身なり、格好はやはり「唐国」という物語絵に描いていると同じことである。迎えに来る人々の参上するさまなので、動的な描写だと思われる。

④③そなたのつまの御簾捲きあげて、いみじうしやうぞきたる女房、うるはしく髪上げ、裙帯、領布などして、いろいろ団扇をさし隠しつつ、錦を敷ける縁に、十余人ばかり並びゐたり。上手の描きたりし唐絵にたがはず。 (①三九頁)

中納言が垣間見した唐国の女房の絵姿である。十人余りの並びながら座っている姿なので、静的描写だと思われる。

④④……いみじう老いたる人の待つは。ないがしろなる烏帽子して、金杖つきて、花を見上げつつ、月の明かきをながめて立てるさま、絵に描けるやうに神さびをかしきに、…… (①六六頁～六七頁)

中納言は山陰を訪ね、偶然「絵に描けるやう」な老翁に出会った。老翁の月を眺めながら、立っている姿なので、静的描写である。

④⑤朝ぼらけの山かげ、木暗く霧りわたるに、後の御方の妻戸押しあけて、簪うるはしく、例の絵に描きたるやうなる人々、さし出でて見送るに、立ちかへりやすらひつつ、…… (①八六頁～八七頁)

ここは後の女房たちの妻戸からのり出して中納言を見送る場面である。見送る側の人々ののり出している姿は、静的といいきれないので、やや動的といえるだろう。

④⑥三四五の君、琴どもかき合はせて、月をながむるほどなり。……いとうるはしくしやうぞき、髪上げてゐたる、月かげともいづれともなく、絵に描きたるやうなり。 (①二〇頁)

中納言が大臣家を訪ねる時に、姫君たちの姿を絵に喩えている。姫君は座りながらも、演奏しているので、その動作が伴う。したがって、動的な場面である。

④⑦このたびは、水の流れも石のたたずまひも、いとようつくろひないたれば、見どころまさりて、絵に描いたるやうなるに、…… (③二七七頁)

④⑦では吉野の庭園を絵に喩えている。立石は静的だが、「水の流れ」は動

的である。

④⑧君は帳のうちに、三尺の几帳引き寄せて隠れ給へるに、鈍色ばかりに、上に白き御桂かさねて、御髪のをちたう、扇などを広げたらむやうに、鈍色の桂にけざけざと見えたる、絵に描きたるやうにめでたければ、…… (④三四七頁)

これは中納言が垣間見した姫君の様子である。姫君の髪の色と桂の鈍色が非常に対照的に絵に見立てられている。この姫君の隠れている様子は静的な描写であらう。

●『更級日記』一例

④⑨にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風をたて並べたらむやうなり。…… (五) 相模より駿河へ、足柄山中にて遊女に会う、二八七頁

上洛中に、「にしとみ」の山を、絵を描いた屏風を並べたようだと褒めている。ここでは静的な描写だと思われる。

●『夜の寝覚』二例

⑤⑩……いとめでたくきよらに、髪上げうるはしき、唐絵の様したる人、琵琶を持て来て、…… (巻一、十七頁)

この⑤⑩は唐風の髪型を絵に喩えている。琵琶を持って来ているので動的な描写である。

⑤⑪……姨捨山の月見む心地して、月影にいとなまめかしくて、岩の上に寄り居たまへる、絵にかきたらむやうに見ゆるも、…… (巻五、五四〇頁)

ここでは、右大臣の優美な姿を絵に喩えている。男君が岩の上に寄りかかっているのに、静的な描写である。

●『大鏡』一例

⑤⑫秋の織物の三重襲の御唐衣に、秋の野を縫物にし、絵にも描かれたるにやとぞ、目もとどろきて見たまへし。 (一人「一、太政大臣道長」三五八頁)

これは中宮威子の目も眩むほどの素晴らしい服装の描写である。単に服装が注目されているので、静的な描写である。

●『今鏡』一例

⑤⑬常の所よりも、御すまる有様いとはえぐしく、唐絵などのやうに、山

の色、水のみどり、木立、立石など、いとおもしろきに、……

(「子日」十三頁)

ここでは、上東門院彰子の庭園の様子を唐絵に喩えている。庭園の景色に動いているものを感じないので、静的な描写である。

●『とりかへばや物語』三例

⑤4……御髪はつやつやとまよふ筋なくゆるるかにかかりて、丈に二尺ばかり余りたまへる末つきの白き御衣にけざやかにもてはやされたるなど、いづくともなく絵にかきたるほどなるを、…… (①二〇二頁)

父が几帳の中を覗いて見た督の君の様子である。黒い髪と白い召し物の対比で、まるで「絵」のように美しいと思われている。静的な描写である。

⑤5……前に水蜘蛛手に流れて絵に描きたるやうなるに、…… (③三四八頁)
男君が宇治で女性を垣間見している時に、遣水が蜘蛛手に流れている様子を絵に喩えている。流れているので、やや動的な描写である。

⑤6几帳に透きたる人も、見入るれば、紅の織単衣に同じ生絹の袴なるべし、いと悩ましげにてながめ出でて臥したる色あひ、はなばなと光るやうにほひて、額髪のこぼれかかりたるなど絵に描きたるやうにて、……

(③三四八頁～三四九頁)

⑤5の男君の垣間見の続きの描写である。垣間見された女君が絵に描いたように素晴らしいととらえられている。女君は臥しており、さらに「いといたう」うちながめてもの思ひたる」、つまり、物思いに沈んでいる様子なので、静的な描写である。

*

以上の諸例、及び『源氏物語』の用例数を合わせてみると、「絵に描きたるやう」とこれに類する表現、計五十三例のうち、三十九例は静的な場面、七例は動的な場面、そしてほかの七例は微妙な用例であるとみられた。

まず、動的な七例を見てみよう。沢田「一九八五」では、見立てには動的な一面も否定できないということをも指摘している。確かに絵画は「動的」な場面をも表せよう。例えば、⑬の纓について、家永「一九九八」が「風を絵画に表現するには風に吹かるる物によつて示す外ない」と指摘した通り、

吹き上げられた纓によつて風を表現しているだろう。また、③4④の物運ぶ姿について、「大嘗会悠記主基詠歌」に「会坂関行人運調物」などの調物運搬の絵に関する記録が見られる。④2の唐人図は現存最古の大和絵屏風——神護寺由来の山水屏風に描かれた唐人の様子から想像できよう。③5の会話している男女姿も、④7⑤5の流れる水も、大和絵の素材としてよく描かれたものだろう。要するに、「絵」は「動」を表現することがまったくできないわけではない。ただし、どれほど表現できるのが問題点だと思われる。またこれらの「動的」な場面は「絵」に描けるとしても、せいぜい一つの動作しか表現できないだろう。一連の動作を表現するのは難しいと思われる。

また、「静」か「動」かを確定しがたい七例を見てみよう。例えば、「髪」に対する描写、本文②3『紫式部日記』の内侍二人、③0『栄花物語』の内侍二人、④5『浜松中納言物語』の女房、④6の姫君、⑤0『夜の寝覚』の琵琶を持つ天人といった、これらの五例の人物は全て動いているものの、「絵」に喩えられているのは「髪上げうるはし」い唐人(例えば、正倉院蔵の「鳥毛立女屏風」)のような髪姿だけだと思われる。故に、静的な描写だと考えられる面を有するといえよう。また、⑫の川沿いにおける馬の動きを描写しているにしても、作者が「遙かに」見ているのは、馬の姿より、静かな景色の方だと思われる。⑭も同じように、食事仲の仲忠より、「絵」に喩えられているのは「静か」な楼の方だろう。

以上のように判断してみた場合、静と動の比率は46対7になる。沢田「一九八五」が論じた通りに、見立ては静止した状態としてとらえやすい傾向がある。「絵に描きたるやう」の静と動の用例数の比率を見れば、その傾向は認められると言えよう。続いては、「絵に描かほしう」の用例を作品ごとに見てみよう。

三 平安仮名文学における「絵に描かほしう」など

「絵に描かまほしう」とこれに類似する表現は、『源氏物語』を含む八作品で二十例見られる。本節では、『源氏物語』以外の十七例を見てみよう。

●『栄花物語』九例

⑤7 今宵のこと絵にかかせて人にも見せまほしうあはれなり。

〔とりべ野〕①三三二頁

これは定子葬送の様子についての感想である。「雪いみじう降りて」、「いみじう泣」にいる人々の様々な様子を説明した後で、その有様こそを絵に描かせて、人に見せたいと感嘆している。人々の様子は動的な描写といえるだろう。

⑤8 宮と御物語せさせたまひて、うち笑はせたまふなども聞ゆ。若き人々おしこりたる御几帳の際など、絵にかかまほし。

〔つばみ花〕②三八頁

三条帝が中宮妍子と話しながら笑っている場面である。また、若女房の几帳のそばの有様などを絵に描きたいほどである。人々の様子なので、動的な場面である。

⑤9 御衣の色も、冬になるままにいとどさし重なり、色濃きさまにさまさまおはしますを、この御さまを絵にかかばやと、あはれに見えさせたまふ。

〔ゆふしで〕②一一三頁

三条院崩御後、人々が着用している喪服は冬になると着重ねることになって、色濃くみえる。絵に描いてみたいその喪服の有様は、静的な場面だと考えてよい。

⑥0 院は、御衣ども直衣などの色をいとおつまつましかたはらいたく思せど、……けぢかう愛敬づきをかしうおはしませば、今宵の御有様かならず絵にかくべし。

〔ゆふしで〕②一二二頁

これは小一条院と寛子の露頭の儀式に、小一条院の様子である。「今宵の御有様」というのは服装及び院の親しみやすい雰囲気を感じている。動的な描写であろう。

⑥1 ……みなおのおの被きつつぞ引き乱れて出でたまふほどは、「土に曳き泥を踏んで、惜しむ心無し」とにこそありけれと見ゆ。かくて乱れよろぼひたまふほど、絵にかかまほしくをかしうなん。

〔おむがく〕②二九四頁―二九五頁

法成寺金堂供養の宴後、酒に酔い乱れた人々はもらった禄の御衣を肩にか

けて、引きずるようにして退出している。ここで絵に描きたいとされるよっぱらいの姿は動的である。

⑥2 このたびはもろともに二宮うちつづきて渡らせたまふほど、あなめでたと見えさせたまふ。皆御裳、小桂など奉りたり。御髪ひとと上げさせたまへり。いへばおろかなり。御有様ども絵にかかまほし。

〔御裳ぎ〕②三三五頁

ここは禎子内親王の御裳着の儀式に、彰子と妍子揃って渡る場面である。両宮の優美な服、髪の有様は絵に描きたいほどであるという。渡っているの、動的な場面である。

⑥3 一品宮は、短き御几帳を身に添へさせたまへれば、あらはならねど、また隠れなし。うつくしうささやかにおはしまして、さし並ばせたまへる、絵にかかまほしく見えさせたまふ。

〔たまのかざり〕③一〇九頁

これは東宮敦良親王が禎子内親王の直廬へ初めて訪ねた場面である。一品宮は几帳を身によせ、すっかり見えないが、隠れているわけでもない。東宮と並んでいる様子は、絵に描いてみたいほどであるという。座っているの、静的だと考えてよい。

⑥4 一品宮の御服やつれもいとあはれに心苦しう、絵にもかかまほしうおはします。

〔たまのかざり〕③一三九頁

妍子の亡き後、喪服の一品宮は面やつれしている。その不憫の様子を絵にも描きたいほどであると語られている。これも静的な場面とみてよからう。

⑥5 ……御棧敷いみじうめでたくて、女房の衣のこぼれ出でたるほど、絵にかかまほし。まことに目もあやなり。

〔紫野〕③五二八頁

春日祭に、立派な棧敷と女房の衣裳のこぼれ出ている有様が絵にかきたいほどだとされる。これも静的な描写だと考えられる。

●『夜の寝覚』二例

⑥6 糸を繕りかけて、末を押し切りて結び付けたらむやうに、なよなよとかかりたるほどなど、絵にかかまほしきを、知らぬ人と見むだに、……

〔巻四、三七六頁〕

寝覚の上が見た石山の姫君の様子である。特に、髪のかなよと垂れか

かっている有様などを絵に描きたいと語られている。姫君は「おどろ」いてから、のちに「上の御陰に居隠れ」たという一連の姿勢の変化が見られ、さらに、髪が「なよなよ」しているの、やや動的な場面だと考えても良いか。

⑥⑦若君は、……花の中に下りて、童べと交じりて歩きたまふは、……小姫君、……我しもましてむつれ遊びたまふも、限りなくうたぐり……さまざまうち見渡されて、絵にかまほしく、うつくしき御様どもにて並び居たまへるも、……

(巻四、四八三頁～四八四頁)

中略の部分は主に服装の描写である。寢覚の上は三人の子供が遊んでいる姿を絵に描き留めたいという心情を抱く。若君の「花の中に下りて、童べと交じりて歩」いている姿、小姫君の「我しもましてむつれ遊」んでいる振舞いなど、動的な描写である。

●『狭衣物語』三例

⑥⑧……東面の中の柱に寄りあさせたまへる、御様体、頭つき、御髪のかかりなどの、絵にもなほ少しは描き似せて、人に見せまほしき御さまなる。

(③一五二頁)

源氏の宮の有栖川を眺めながら柱に寄りかかっている姿を絵に描いて、狭衣の君に見せたいということが語られている。ここでは、静的な描写である。

⑥⑨……袖を顔に押しあてて泣きたまふ。いとど黒き御衣に、いとどもてはやされたまひて、御頭つき、髪のかかりなども、絵に描きとりて人に見せまほしかりけり。

(④二九五頁)

宰相中将の妹姫が母君を失い、泣いている時に、彼女の頭つき、髪のかかり具合などを絵に描きたいとされている。泣いているので、やや動的な描写とを考えてもよいだろう。

⑦⑩……峰の嵐、あらあらしう、時々吹き渡して、散り紛ひたるなど、絵にかまほしうをかしきを、……

(④三七六頁)

狭衣帝の御幸の時に、嵐で紅葉の散り混じっている様子を絵に描きたいと語られている。これはかなりの動的な描写である。

●『讃岐典侍日記』一例

⑦⑪……もろともに御覽せし有様など、絵かく身ならましかば、つゆたがへずかきて人にも見せまほしかりしかど、…今もかきくらし降るさま、こちたげなり。

(下、四六四頁～四六五頁)

作者の思い出に堀河帝と一緒に雪を見る情景を、もし自分が絵を描く身になれば、絵に描いて人に見せたい心情である。この二人の様子だけではなくて、目の前の景物「竹の台、火たき屋」(中略の部分にある)なども、さらに今も降る雪も絵に収めたいと思っている。故に、全体的には動的であろう。

●『大鏡』一例

⑦⑫……したり顔に笑ふ顔つき、絵にかまほしく見ゆ。

(【天】六十八代 後一条院 敦成 五八頁)

世次が自分のことを「古体の鏡」と自賛した後で、その得意そうな笑顔を見せているのを絵に描きたいと語られる。笑っている「顔つき」なので、やや動的な描写である。

●『今鏡』一例

⑦⑬……新院御直衣に紅の打ちたる御衣いださせ給て、御馬に奉りけるこそ、いとめづらしく、絵にもかまほしく侍りけれ。

(【すべらぎの中 第二五六頁】)

御幸の時に、新院(鳥羽院)の乗馬姿を絵に描きたいとのことである。乗馬しているのが、当然動的な描写である。

*

以上をふまえて、まず、「絵に描かまほし」の用例が最も多い『栄花物語』(九例)について検討しよう。『栄花物語』の「絵に描きたるやう」の十五例に関しては、正編(三十巻)と続編(十巻)はほぼ同じ数で、8対7になる。一方、「絵に描かまほし」は8対1になる。要するに、「絵に描かまほし」という新たな表現は紫式部の『源氏物語』(三例)によって開拓されて以来、同じ文化圏に属した『栄花物語』の作者(赤染衛門たち)によって、積極的に活用されているように見受けられる。ちなみに、『栄花物語』において、「絵に描きたるやう」は巻七「かかやく藤壺」の彰子入内の場面から、「絵に描

かまほし」は巻八「とりべ野」の定子葬送の場面から用いられるようになる。両者とも儀式に関わる表現であることも留意されよう。

あらためて、『源氏物語』における「絵」に描きたいとされる対象を見てみると、⑨の侍童、⑩の光源氏と紫の上、⑪の浮舟であり、いずれも私的な場面である。一方、歴史記述の性格を有する『栄花物語』においては、⑤⑦の葬式、⑥⑩の露顕、⑥⑪の法成寺金堂供養、⑥⑫の裳着、⑥⑬の春日祭の五例は行事・人事の儀式である。つまり、『栄花物語』以来、「絵に描かまほし」は「公的」な儀式に使用され、また、⑦⑬の『今鏡』ではそれが継承されていると見える。

さらに、絵の内容から見ると、当時実際に描かれた絵画の内容は家永「一九九八」によつてまとめられているが、景物画にしても風俗画にしても、特に屏風絵は基本的に、めでたい時に制作される。しかし、『栄花物語』における⑤⑦定子の葬送、⑤⑨⑥④の喪服姿、これらの死に関わる主題は恐らく当時において絵には描かないものだろう。そのせいか、⑤⑨⑥④は「静的」な場面ではあるが、「絵に描かまほし」が用いられている。そして、⑥⑨の『狭衣物語』も喪服の姫君の泣いている場面である。

最後に、「静」と「動」の使い分けの視座から見よう。「絵に描かまほし」の用例は二十例あり、そのうち五例は静的な場面だと考えられた。特に『栄花物語』では、「静」と「動」は5対4なので使い分けられているとは認められない。一方、『栄花物語』を除けば、用例数は少なめながら、全体的に「動的」な場面で使用されていることがわかる。

*

そもそも「絵に描かまほし」は、「絵に描きたるやう」とどのように差異化されているのだろうか。一つは「絵」に描きたくても描けない場合に、「絵に描かまほし」という表現になると推察されよう。例えば、以下の(一)～(三)のようなケースである。さらに二つめとして、(四)のように新たな要請ということも考えられる。

(一) 動的な動作、特に時間の連続性が描けない。⑨⑥⑦の侍童、子供の遊ぶ動作などがそれに相当するだろう。第二節にも述べた通り、「絵」は「動」をまったく表せないわけではないが、一連の動作を表現するのは至難だろ

う。なお、異時同図法は早く奈良時代の仏壇画の捨身飼虎図（法隆寺蔵の玉虫厨子）で使用されているが、絵巻物などに普及するのは、平安後期の『伴大納言絵巻』『信貴山縁起絵巻』前後である。

(二) 当時、「絵」としてあまり描かない対象。例えば、前述した『栄花物語』に見える葬式、喪服などの死に関わる場面である。なお、国宝「聖徳太子絵伝」には確かに太子の薨去と葬送の場面があるが、これには釈迦仏画及び太子信仰の影響が見られる。世俗画や風俗画一般とは一線を画すと考えている。

(三) 音、「あはひ」など、「絵」で表現しにくいもの。風は表現できるが、⑪の読経の声、⑤⑧の帝などの笑い声、⑩の光源氏と紫の上の関係は絵としては表現しにくいだろう。

(四) 新たな絵への要請。⑥③⑥⑤⑥⑧に語られる美しい姫君、女房などについては、語り手にとつて、似たような絵を見たことがある場合であっても、想像以上に素晴らしくまた珍しいが故に新しい「絵」として描きたいという叙述になっているのだろう。

要するに、「絵に描きたるやう」は読者に以前見た絵を喚起させ、共感を呼び起こすことが可能になりうるということであろうが、それに対して、「絵に描かまほし」はこのような絵は今までなかった、見たことがないということとを強調していると考えられよう。

おわりに

本稿では、「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」などという、絵に見立てることに関係する表現全般を対象に、まず『源氏物語』におけるその使い分けを分析し、個々の例において「静」と「動」のいずれの傾向があるのかということを検討した。さらに、平安朝仮名文学まで視野を広め、その使い分けが見られるかどうかを分析してきた。用例を表1「平安朝仮名文学作品の絵に見立てる表現の分類」にまとめている。

当然、微妙な例が少なからずあったわけだが、ひとまず「絵に描きたるやう」では五十三例のうち「静的」を表すのが四十六例、「絵に描かまほし」では二十例のうち「動的」を表すのが十五例という結果にたどり着いた。全

表1：平安仮名文学作品の絵に見立てる表現の分類

絵に描かまほし		絵に描きたるやう		総数	
動的	静的	動的	静的		
		1	1	2	蜻蛉日記
			1	1	うつほ物語
			6	6	枕草子
3			8	11	源氏物語
			6	6	紫式部日記
5	4	3	12	24	栄花物語
		2	5	7	浜松中納言物語
			1	1	更級日記
2			2	4	夜の寝覚
2	1			3	狭衣物語
1				1	讃岐典侍日記
1			1	2	大鏡
1			1	2	今鏡
		1	2	3	とりかへばや物語
15	5	7	46	73	静 (51)、動 (22)

体的に「絵に描きたるやう」は「静的な場面」を表し、対照的に「絵に描かまほし」は「動的な場面」を表現すると言える。

次いで、各作品の用例数の多寡から考えてみよう。例えば、同じ長編物語にしても、『源氏物語』には多く見えるが、『うつほ物語』に一例しかない。『栄花物語』には二十四例あるのに、同じく歴史物語である『大鏡』には二例しか見えない。こうした顕著な違いの要因として、次の二点が考えられる。

(一) 作者の「絵」に対する関心の度合い。表2に示した通りに、作品の長さはともかく、それぞれの絵に対する関心は明確に異なっている。当然こう

表2：絵の用例数

儀式	絵に見立てる表現	絵		
		絵 (蒔絵・絵師・絵所以外)	総数	
0	1	13	32	うつほ物語
1	11	82	89	源氏物語
4	6	7	7	紫式部日記
18	24	79	100	栄花物語
1	2	7	10	大鏡

した表現の多寡にも影響を与えているだろう。また、記録性がある日記・歴史物語では、行事・人事の儀式に中宮や女房、貴公子達の姿などに注目し、「絵」に見立てる傾向がある。『紫式部日記』『栄花物語』では確かにそういうふうに見える。しかし、『大鏡』では、女房、貴公子達の姿より、行事における出来事そのものに注目する。これは、『大鏡』の作者が男性かもしれないこと、もしくは長々と語る語り手の大宅世継たちが男性であることが関係している可能性がある。

(二) 絵の役割。『うつほ物語』においては、「絵」は重要な役割をしていないように見受けられる。例えば、唯一の絵を見る場面では、仲忠が犬宮に「面白き絵など取りて見せ」たが、犬宮は「殊に、例のやうにも見給はで、心に染みて琴を弾き給ふ」(楼の上 下「八九一頁」)。つまり、絵より琴のほうが、心の慰めになっている。対照的に『源氏物語』においては、「絵」は重要な役割を果たしている。例えば、作者は前代未聞の「絵合」という宮廷行事を設定した。この「絵合」で、光源氏は権中納言との争いに勝利し、権力・栄華の頂上へと近づく契機とした。

以上をまとめると、「絵」になぞらえる表現というのは、絵の「静止画」としての性質と密着した「絵に描きたるやう」から出発しつつ、『源氏物語』以降、従来の絵を超えるような性質をもつ様子、場面などを対象として、「絵に描かまほし」が表現として開拓されたようだ。そして、特に留意すべきは『栄花物語』が「絵に描かまほし」を九例も用いているという点である。こ

の『栄花物語』では公的な儀式、死と関わる場面を構成するために活かされている。また平安後期物語でも、用例がわずかだが、このような用法は継承されていると見える。

さらに、「絵に描かまほし」という表現の使用は、中国における「堪画」「入画」といった表現、また白居易との関連性が見られると予想する。これらに關しては、別稿に譲りたい。

*『うつほ物語』の引用は室城秀之校注『うつほ物語 全改訂版』（おうふう、二〇〇一年）による。『久安百首全釈』の引用は木船重昭の『久安百首全釈』（笠間書院、一九九七年）による。これら以外の本文の引用は『新編日本古典文学全集』により、巻名・巻数・頁数を示した。「絵」に関する用例の確認は以下の索引類を参考にした。『源氏物語大成 索引篇』池田亀鑑（編）（中央公論社、一九五六年）、『かげろふ日記総索引 索引篇』佐伯梅友・伊牟田経久（編）（風間書房、一九八一年）、『宇津保物語本文と索引 索引篇』宇津保物語研究会（笠間書院、一九七五年）、『枕草子…本文及び総索引』神原邦彦（編）（和泉書院、一九九四年）、『栄花物語本文と索引自立語索引篇』高知大学人文学部国語史研究会編（武蔵野書院、一九八五年）、『平安日記文学総合語彙索引…土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記』西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵（共編）（勉誠社、一九九六年）、『浜松中納言物語 総索引』池田利夫編（武蔵野書院、一九六四年）、『狭衣物語語彙索引』塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子（共編）（笠間書院、一九七五年）、『讃岐典侍日記…本文と索引』鎌田廣夫・相澤鏡子（編）（おうふう、一九九八年）、『夜の寝覚総索引』阪倉篤義・高村元継・志水富夫（共編）（明治書院、一九七四年）、『大鏡新考 総論・索引編』保坂弘司（学燈社、一九七四年）、『今鏡本文及び総索引』神原邦彦・藤掛和美・塚原清（編）（笠間書院、一九八四年）、『とりかへばや物語総索引』鈴木弘道（編）（笠間書院、一九七七年）

注

- (1) こうした表現は概ね「絵」の限界を示している。例えば、「初音」では、男踏歌の一行が六条院に来た時に、「ほのぼのと明けゆくに、雪や散りてそぞろ寒きに、竹河うたひてかよれる姿、なつかしき声々の、絵にも描きとどめがたからんこそ口惜しけれ」(③「一五九頁」というように、雪景色も貴公子の歌う姿も絵に描き残すことが難しいから、残念であると語られている。なお、九例のうち、三例は静的で、六例は動的な描写である。動物的ものの描きにくさを示す傾向があろう。
- (2) 「絵に描きたるやうに」に關しては、西行の没後（一一九〇年以降）に友人がまとめた「残集」の詞書に一例見られる。

平安仮名文学における「絵に描きたるやう」と「絵に描かまほし」

- (3) 次の二首が挙げられる。

・我が妻も 絵に描き取らむ 暇いづまもが 旅行く我あれは 見つづ偲はむ
（万葉集・卷第二十・四三二七）

・消えぬ間に 絵にかきとむる 人もがな 雪ふるさとの 今朝のけしきを
（久安百集・卷六・冬歌・七九八・小大進）

なお、「絵」に描いておきたいという「我が妻」も「雪景色」も、静的な動物的かという点は明確といえないようである。

引用文献

伊井春樹「二〇〇一」王朝人の生活の中の絵画」久下裕利（編）『源氏物語絵巻とその周辺』新典社

家永三郎「一九九八」『倭絵景物画の流行』『上代倭絵全史 改訂重版』名著刊行会上野辰義「二〇〇二」『絵画と書——その複合性と記録性』増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成 第十一卷 源氏物語の行事と風俗』風間書房

片野達郎「一九九二」『源氏物語の絵画』今井卓爾「ほか」（編）『源氏物語講座 7 美の世界・雅の継承』勉誠社

沢田正子「一九八五」『枕草子の見立てと美意識』『枕草子の美意識』笠間書院

モストウ・ジョシユア「一九九七」『源氏物語』の「絵」『源氏研究 2』翰林書房

‘We ni kakitaru yau’ and ‘We ni kakamahoshi’ in Heian Kana Literature

Zhuojing YANG

Abstract

This paper first analyses the usage of the expressions like ‘we ni kakitaru yau’ (like a painting) and ‘we ni kakamahoshi’ (the writer or the character desire to have the scene captured in a painting) in *The Tale of Genji*, and examines whether there is a tendency towards ‘stillness’ or ‘movement’ in individual instances. Furthermore, it broadens the perspective to the Heian period kana literature and analyses whether there is a distinction between these two uses. Even there are several subtle examples, but overall, it can be said that ‘we ni kakitaru yau’ expresses a ‘static scene’, while ‘we ni kakamahoshi’ expresses a ‘dynamic scene’.

In addition, it seems that expressions likened to ‘paintings’ started from ‘we ni kakitaru yau’, which is closely connected to the idea of ‘still paintings’. However, since *The Tale of Genji*, ‘we ni kakamahoshi’ has been developed as an expression for scenes that have a nature that exceeds that of conventional paintings. It should be noted that the *Eika Monogatari* uses nine examples. In the *Eika Monogatari*, the expression is used to compose public ceremonies and death-related scenes. Such usage also appears to have been inherited in the later Heian period tales.